理工学部體育會 75 年史の刊行を祝って

独立行政法人日本学術振興会理事長
前慶應義塾長・元慶應義塾大学理工学部長
元慶應義塾大学理工学部體育會会長
安西 祐一郎

鰭雲(はたぐも)遠き野に佇(た)ちて　　春を送りて鳥啼けば
帰らぬ生命(いのち)惜しまれて　　君がまみにも涙あり
嗚呼　青春の日は逝(ゆ)かんとす

で始まる「惜春の譜」(注)。理工学部の卒業生、とりわけ理工学部体育会出身者によって歌い継がれてきた逍遥歌です。

1939 年(昭和 14 年)6 月 17 日藤原工業大学の開校式から 1 年後の同月同日、第 1 回記念祭の大運動会、藤原銀次郎理事長と小泉信三学長(慶應義塾長と兼務)の前で初めて学生たちが歌ったこの歌には、小泉学長の言われた「自我作古」の意気をもって青春の日々を送った大先輩のロマンが宿っています。

この「惜春の譜」とともに始まったとも言える慶應義塾大学理工学部 75 年の歴史に、理工学部体育会の 75 年はぴたりと重なっています。時が重なるだけではなく、学問とスポーツの両方に青春を燃焼させた多くの理工学部体育会の学生たちの気概が重なってくるのです。

かつて私もそういう学生の一人でした。工学部体育会ラグビー部の門を叩いたのは 1960 年代半ば、40 年以上も昔のことになります。

石ころだらけの小金井グラウンドで果てしなく続くランパス、日が暮れたあとの暗闇のなかを車のヘッドライトで照らしながら組み続けたスクラム。厳しい練習で体中が痛くて駅の階段を上がれなかった私が、先輩後輩仲間たちに助けられて関東理工系リーグ戦準優勝を経験し、学問の道に進みながら今もスポーツ界に関与していられるのは、学業とスポーツを真に両立させてくれた理工学部体育会のお蔭に他なりません。

自分自身の経験を例に取りましたが、おそらくは多くの理工学部体育会各部卒業生にとって、勉学とスポーツの両方に明け暮れた日々は、何ものにも代えがたい人生の宝になったのではないでしょうか。

理工学部体育会の歴史の揺りかごであり続けてきた塾大学理工学部の、戦前戦中戦後にわたる苦難の歴史、諸々の障害を乗り越えてきた先人の苦闘については、多くの人の語るとおりです。その中には、キャンパスを転々とするなかで部の歴史を紡ぎ続けた理工学部体育会各部の努力も含まれています。私自身、とくに創立 60 周年にかけての理工学部長だった当時、こうした歴史の重みを実感するできごとに多々遭遇しました。

体育会のあり方についてもいろいろ考えるところがありましたが、とくに塾長在任当時には、誤解されるのを承知のうえで、塾体育会の卒業生や学生諸君に「勝たなければ体育会ではない」と繰り返し言い続けました。そう言い切れたのは、「闘いに勝たんとする強固な意志・・・」で始まる小泉信三塾長の有名な四ヵ条が頭にあったのと、慶應義塾の体育会として文武両道、フェアプレー、グッドルーザーの精神は当然の前提として、そのうえで塾生らしい知恵と意欲と練習によって「不可能と思い込んでいた勝利を実現できるし、そうして勝つことを通して人は磨かれる」ということを、理工学部体育会での経験で肌で知っていたからだと思っています。

理工学部長をしていた創立 60 周年のころから 15 年が経ち、グローバル化・多極化への世界の変転が現実化するなかで、日本の立ち位置と判断力が重要になっています。諸国・地域の入り乱れるこれからの厳しい時代に、日本と世界をリードすることのできる、体力、気力、知力、そして徳を合わせ持つ若人を育み、彼らの青春を燃焼させる場として、創立 75 周年を迎えた塾大学理工学部、とりわけ理工学部体育会に、格別の期待を寄せております。

友よ我が青春(はる)逝かんとす　　若き生命(いのち)の惜しければ
友よ謳わん眉上げて　　三年(みとせ)の春の意気の歌
嗚呼　青春の日に矜持(ほこり)あり　（「惜春の譜」四番）

理工学部體育會 75 年史の刊行をお祝いするとともに、理工学部体育会先輩団体連合会をはじめ編纂に関わった方々に感謝申し上げます。また、慶應義塾体育会をはじめ理工学部体育会の活動をご支援いただいてきた方々のご尽力に、あらためて感謝申し上げます。

75 年を経た理工学部体育会のますますの発展を祈念しております。

（注）http://homepage2.nifty.com/a-isaka/kstac/sekisyun.htm